

# ルイス・キャロルの詩の言語研究 --- 特に脚韻語について ---

下笠 徳次

## A Linguistic Study of Lewis Carroll's Poems -- with Special Reference to Rhyme Words --

Tokuji SHIMOGASA

0. ルイス・キャロル (Lewis Carroll) (1832 - 1898) はオックスフォード大学の数学教師が本職であったが、傍ら児童文学史上燦然と輝く2つの作品：『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) と『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1871) で世に名を遺した。前作は偶然の作品と言ってもいい。最初は『地下の国のアリス』(*Alice's Adventures Underground*, 1862) として出版されたが、うなぎ上りの評価に気をよくしたキャロルは推敲に次ぐ推敲を重ね、改作し約2倍の分量にして『不思議の国のアリス』に昇華した。後作は最初から十分に練られたもので、西洋将棋チェスの進行になぞらえて話が進むことになる。どちらの作品も全12章から成り、近・現代英語の原型あるいは雛形とも言われている。
1. キャロルは一方では詩の分野でも異才を発揮しているのである。かなりの数の詩を遺し、一大全集になるほどの分量となる。『スナーク狩り』(*The Hunting of the Snark*, 1876) は長編詩の形をとっている。この詩の詩形は1連4行でa-b-a-bが主だが、途中でa-b-c-bに変わっている連もある。この逸脱が当てはまる詩は他にも少なくない。非常に多くの詩形を実験していることになる。論理学も修めているキャロルならではの、と思われるほど実に込み入った操作がなされている箇所も少なくない。言葉遊びそのものを楽しんでいる感がある。*Sylvie and Bruno* (1889) と *Sylvie and Bruno Concluded* (1893) も詩の形式の物語となっていて、前者は1連が8行、3行、4行、5行、6行と複雑に入りこんでいる。後者は1連が11行、8行、6行、4行とこちらも複雑な構成となっている。
2. これらの多くの詩作は自分で楽しむためでもあったし、友人や幼い弟妹を楽しませるためでもあった。純粋な子どものための詩あり、パロディあり、風刺詩あり、謎解き詩あり、そして所謂「ノンセンス」詩あり、シャレードあり、アクロスティックあり、で大変変化に富んでいる。まさしく 'mischmasch' ('ごたまぜ') である。これらの詩は高揚した気分、機知に充たされ、またときには悲哀溢れるものも見られる。これらは Carroll の想像力が最高度に達していることを示している<sup>1)</sup>。そしてキャロルは2つの『アリス』物語そのものの中にも多くの詩を挿入している。よく知られているものに 'You are old, Father William', 'Beautiful Soup', 'The Queen of Hearts', 'Jabberwocky', 'Tweedledum and Tweedledee',

'Humpty Dumpty', 'The Lion and the Unicorn' などがある。ほかにも散文の中で突然、詩に遭遇することもある。あのネズミの尻尾の形で語られることになる、ネズミが獷猛な犬に問答無用で裁判にかけられる話も実は立派な詩の形式をとっていることになる。隠れたところにも詩を挿入している。

以上のキャロルの詩には総じて叙情性 ('lyricism') はないが、例外もある。それは『不思議の国のアリス』の頭に置かれているあの有名な「黄金の昼下がり」の歌 ('All in the Golden Afternoon')、『鏡の国のアリス』の後ろに置かれている、アクロスティック (アリスのフルネームを織り込んだ)「人生、それは夢でなくで何ぞ」('Life, what is it but a dream?') を初め、アリスのことが詠まれている、実に素敵な叙情溢れる詩も数編遺している。

これらの叙情性の高い詩を主たる題材としてキャロルの詩の言語について分析していきたい。

3. まずは Carroll の詩の世界で最も素晴らしい、と多くの人々が認めている「黄金の昼下がり」 ('All in the Golden Afternoon') の鑑賞から入りたい。正式のタイトルは 'Lewis Carroll's Dedication' で 1 連が 6 行から成り、a-b-c-b-d-b という詩形になっている：

- 1) All in the golden afternoon  
Full leisurely we glide;  
For both our oars, with little<sup>2)</sup> skill,  
By little arms are plied,  
While little hands make vain pretence  
Our wanderings to guide.
- 2) Ah, cruel Three! In such an hour,  
Beneath such dreamy weather,  
To beg a tale of breath too weak  
To stir the tiniest feather!  
Yet what can one poor voice avail  
Against three tongues together?
- 3) Imperious Prima flashes forth  
Her edict 'to begin it' ---  
In gentler tone Secunda hopes  
'There will be nonsense in it' ---  
While Tertia interrupts the tale  
Not *more* than once a minute.
- 4) Anon, to sudden silence won,  
In fancy they pursue  
The dream-child moving through a land  
Of wonders wild and new,  
In friendly chat with bird or beast ---

And half believe it true.

- 5) And ever, as the story drained  
The wells of fancy dry,  
And faintly strove that weary one  
To put the subject by,  
'The rest next time ---' 'It is next time!'  
The happy voices cry.
- 6) Thus grew the tale of Wonderland:  
Thus slowly, one by one,  
Its quaint events were hammered out ---  
And now the tale is done,  
And home we steer, a merry crew,  
Beneath the setting sun.
- 7) Alice! a childish story take,  
And with a gentle hand  
Lay it where Childhood's dreams are twined  
In Memory's mystic band,  
Like pilgrim's wither'd wreath or flowers  
Pluck'd in a far-off land<sup>3)</sup>.

幾度も幾度も音読すると分かるが、なんと抒情溢れる素敵な詩であろうか。この詩そのものがゆっくりと流れていく感がある。それはあたかも Isis 川 -- 『不思議の国のアリス』が生まれる発端となった、運命の川上りの行われた川 -- の緩やかな流れそのものである。Oxford にはもう 1 本、Cherwell という川が流れており、アリスたちは通常はこちらの川で遊んでいた。どちらの川も自然の景観がそのまま残されていて、コンクリートで固められた土手ではなく、水鳥が至るところで遊んでいる。時は 1862 年 7 月 4 日。第 1 行目に「黄金の昼下がり」とあるので、好天を想像したくなるが、この日は、Greenwich 測候所の記録によると、曇天であったらしい<sup>4)</sup>。しかし、そこは文学作品、よしとしよう。

Christ Church 学寮の Dodgson (この段階ではまだ Lewis Carroll という筆名はできていなかった) 先生と同僚で Trinity College の論理学の教師、Robinson Duckworth (Dodgson より 2 歳下) に連れられて、アリス三姉妹は Isis 川から約 3 マイル上流にある Godstow という田園牧歌的な村までボートに乗り、ピクニックに出かけることになる。このボートの上で三姉妹にせがまれて話をするようになる。このことが早速この詩の中で歌われることになる。ボートを漕ぐのは Duckworth 先生。出発点は Christ Church のすぐ近くにある Folly Bridge という船乗り場で、今日も変わることなく数隻のボートが常時浮かんでいる。

それでは早速第 1 連から精読・鑑賞してゆくことにする：文頭の 'All' は 'in the golden afternoon' を強めている。'glide', 'plied' という 2 語はこのボート遊びにぴったりの動詞となる。'glide' = '(of ship) pass, proceed by smooth continuous movement' (POD) とあるので、川面をゆっくりすべるように進む光景が臉に浮かぶ。'ply' は 'apply' の語頭消失形で、'(of ship) go

to and fro'の意(POD)なので、「あっちへ行ったり、こっちへ行ったり」となるので、ボートは思うようには前進しなかったことが分かる。こうしてこの2語は縁語となる。3つの 'little' はそれぞれ意味が異なる：それぞれ「未熟な」、「(腕力が) 少ない」、そして「小さな」となる。得てして看過しがちであるが、Carroll は見事に使い分けていることになる。なお、この 'little' はアリスの家の姓、Liddell と微妙に押韻していることも読み取れる。Liddell は /lidle/ と発音する。6行目は 'to guide our wanderings' と読む。ここでもボートはまともには前に進まない、ということが分かる。さて、'make vain pretence' とは？立ち止まって考慮する必要がある。まず 'pretence' は「ふりをすること」(実は『鏡の国のアリス』でアリスはしばしば「～ごっこ」をしよう(Let's pretend ~)と、動詞 'pretend' を使うことになる!)。'vain' には 'doomed to failure' と 'overproud' の2つの意がある。前者は '...in vain ...' (「(結果的に) 虚しい」となり、後者の名詞は W.M. Thackeray 作: *Vanity Fair* の 'vanity' の意(「虚栄」となる。それではここではないずれであろうか。「小さな両の手で」とあるから、うまく漕げるはずはないので、「虚しく」水先案内をすることになる。しかし、いかにも誇らしげに「私たちに漕がせてよ」と言わんばかりにしゃしゃり出る光景も想像してよい。このとき、三姉妹の実年齢はそれぞれ13歳、10歳、8歳。従ってお姉さんと中娘のアリスは漕ごうと思えば漕げたはずである。実際に川上りのある区間で「私たちに漕がせて!」と言った可能性は必ずしも否定はできない。'glid': 'plid': 'guide' の3語は「単に脚韻語に留まらず、本文の意味ともうまく合致している」<sup>5)</sup>。

それでは第2連に移ることにする：

文頭の間投詞 'Ah' は所謂、談話標識で多様な感情 (joy, sorrow, surprise, boredom, administration, contempt, entreaty, remonstrance, etc.) (POD)、('surprise, pity, pain, joy, dislike, etc.) (LDOCE) を表すとある。どの英単語一つを以てしてもびたり表すことは必ずしもできない。ここでは「ああ」がいいかも知れない。発話の文脈の中でさまざまな感情を表すことになる。話し手(ここでは Carroll)の心的態度を先に伝えておくことによって、そのような文脈で後続する発話を解釈するよう聞き手を導くことになる。'ah' 以下で導入される話の内容を強調する働きとなっていて、言いたいことをより自然にさりげなく伝える表現効果がある。'Oh' との使い分けにも留意しなければならない。'cruel Three' の 'cruel' はここでは 'callous to others' (pain) (POD) の意で、Carroll からみたらまさしく「つれない」対象となる。つまり、その対象は 'Three' で言うまでもなく、ボートの上の三人娘: Lorina (13歳)、Alice (10歳)、そして Edith (8歳) を指す。なぜ「つれない」かはこれからその理由が開示されることになる。'such an hour, Beneath such dreamy weather' とは、午後のおそらくは皆が眠くなるような 'high noon' のことであろう。漕ぎ手 Carroll だって眠たくなる時間帯である。'beg a tale of ' は「だれだれに話を強請る」の意。'breath too weak to stir the tiniest feather' とは「軽い羽毛さえ吹き飛ばす力もない呼吸」の意。とてもお話などできっこないよ、という Dodgson 先生の恨めしい声が聞こえてくるようである。次の 'Yet' は対比を表す接続詞で談話標識としてしばしば使われる。'but' より若干意味が強い場合が多い。ここでは「それなのに」が適訳であろう。「あんなにお話をせがまれるのに、一方では 'What can one poor voice avail' とある。「僅か一人の微かな声で抵抗できるはずがあるか」となる。'three' と 'one' の対比にも留意したい。'three tongues together' とは「三人がまとまって喋ると」となる。'tongue' は発声器官としての舌を言う。'muscular organ in the mouth in speaking; language' (POD) とある。'three daughters' とわずかに 'three tongues' と言い換えているところに言葉に拘泥する Carroll の姿がある。

第3連はこの詩の 'key verse' と言えるほどの重要な連となっている：

まず目に留まるのは3つのラテン語: Prima, Secunda, Tertia であろう。英語に直すとそれぞれ 'First', 'Second', 'Third' となる。2行目に 'Her' とあるので、このラテン語の裏にあるのは例の三

人娘、ということが分かる。つまり、お姉さんの Lorina, Alice そして妹の Edith を指す。序ながらローマ帝国の時代、女性は名前ではなく、何々家の長女、次女、三女と呼ばれていた<sup>6)</sup>。語尾の ‘a’ は女性を表す語尾で、今日でも英語圏のみならずスラブ語圏でもよく見られる名前である。‘Imperious’ はもちろん ‘emperor’ の形容詞であるので、「居丈高の、高飛車な」の意で、いかにもお高くとまっているお姉さんそのものの姿である。だから次の ‘edict’ が生きてくる。「勅命」の意なので。‘flash forth’ という弱い頭韻句は ‘emit in a flash’ (POD) の意なので、間髪を入れずにずばり言う、となる。つまり、「早く始めてよ」(‘to begin it’)。アリスはお姉さんに比べると少しおとなしい(‘gentler’) おねだりとなる。そして有名な文章(‘There will be nonsense in it!’)が続く。そのお話には「他愛ない内容のものを入れてね！」となる。この ‘nonsense’ の行き着くところが2つの『アリス』物語となる。お姉さんとアリスはおねだりの強さに強弱はあるが、少なくとも Dodgson 先生の邪魔はしていない。ところが(‘While’)、妹の Edith は「邪魔する」(‘interrupts’) ことになる。その邪魔の頻度が ‘Not more than once a minute’ である。ここの文脈では「精々一分間に一度の割合で」となる。

‘begin it’: ‘in it’: ‘minute’ という脚韻構造は「素晴らしい、天才的」<sup>7)</sup> である。2語:1語の押韻となっている。このタイプの押韻が Carroll の全体の詩の中に幾度となく現れることになる。‘minute’ (‘分’ という意味での) の発音を Dodgson 先生は母国の子どもたちに教えていることになる。尚、Carroll は「言葉遣いの名手」であることを立証している Carroll 研究家もいる<sup>8)</sup>。

第4連に移ることにする: アリスたち三姉妹はいよいよ夢の中の存在となる。

文頭の ‘Anon’ は ‘soon, presently’ (POD) でやや古めかしい副詞。Shakespeare の作品には頻出。今日の英語圏の大学生でも注が必要、と言われていた。‘to sudden silence won’ は「突然静かになり」の意。そして空想の中で彼女たちは夢の中のこどもを追いかけることになるが、その子は誠に突飛な、新しい、数々の出来事で溢れる国を動き回ることになり、鳥やほかの動物たちと楽し気に語らうが、半ばそれを本当のことと考えてしまう、とある。いよいよ Wonderland の住人となる。‘In fancy’ が ‘Wonderland’ に繋がってゆく。‘wild’ は ‘extravagant or unreasonable; fanciful’ (New Oxford Dictionary of English) の意。「信じられないほど突飛な」となる。‘fanciful’ で置換できるので、‘In fancy’ とうまく繋がることになる。‘a land of wonders wild and new’ が即ち、Wonderland である。‘bird and beast’ が期せずし頭韻語句になっている。‘friendly chat’ とあるので、いかにも子どもらしい世界となる。かような世界の住人となると、子どもは現実と空想の境目が分からなくなる(‘half believe it true’)

第5連に移ることにする: さて、語り手はそろそろ疲れて眠気に襲われることになる。ここでは ‘drain’ と ‘dry’ が縁語になっていることに留意して欲しい。

話が尽きると空想という泉は干からびてしまう、とある。素敵なお話となる。そこで疲れてきた語り手(‘that weary one’) は弱くなった声を絞り出し(‘faintly strove’)、話を端折ろうと申し出る(‘to put the subject by’)。「残りは次の機会に --」「今がその次の機会よ！」と三人娘が頑としてさがらない。構造は ‘that weary one strove to put the subject by’ となる。‘weary’ = ‘tired or tiring’ (POD) の意。名詞 ‘well’ = ‘(fig.) source of knowledge or happiness or the like’ (POD) とあるので、ここではアリス三姉妹にとっては「幸せの泉」ということになる。

‘put by’ = ‘lay up, discard, evade discussing or noticing’ (POD) とあるので、ここでは Dodgson 先生がこれ以上お話を ‘discuss’ するのを避ける、とうまく繋がることになる。「残りは次の機会に」 -- 「その次の機会はまさに今よ！」。なんと素敵なお話であることか。三姉妹の頭脳明晰さを表している。と同時に Carroll は論理学も駆使していることになる。be 動詞の斜字体はその語が含まれる文章全体を強めることになる。‘The happy voices’ はもちろん三姉妹のやいのやいのといううるさい声(‘cry’)のことを言う。ところで、この連で大切なことはこれまでの現在時

制が過去形に変わったことである。

第6連に移ることにする：‘Thus’が連続して現れる。「こうして」という、前述の談話をまとめて先に進む役割を果たす談話標識の機能を持つ。いよいよ Wonderland の話が生まれる、とある。それも一つまた一つとゆっくり紡がれてゆき、奇妙な出来事があたかも木槌で打ち出されるかのように（‘hammered out’）である。‘quaint’は『アリス』物語の世界では重要な鍵語となり、queerを初めとする同意語がいろいろと現れることになる。‘the tale is done’=‘the tale is finished’である。こうして船の上の楽しい一団（‘a merry crew’）は西に傾く太陽の下、Isis川を下って家路に向かう（‘home we steer’）とある。

実はこれは事実と反することになる。帰途に向かうころは大雨に遭遇することになって、近くで乗り合い馬車を借りて、陸路で帰ることになる。この辺りのことを Anne Clark がその名著：『The Real Alice』の中で鮮明に記述している<sup>9)</sup>。往復ともボートでのピクニックの方が虚構としては恰好がいい。

さて、いよいよ最終連、第7連に移ることにする：いきなり ‘Alice!’ と呼び掛けていて劇的である。従って、次の英語は命令形となり「アリスよ、この物語を君にあげよう」となる。だから「献呈の詩」（‘Dedication’）となる。「その優しい手で置いておくれ、記憶の不思議な帯飾りの中で子ども時代の数々の夢が紡がれていく場所に。それはちょうど、遥かなる地で摘み取られた花がたとえしおれても、巡礼達の想いは枯れることなくいつまでも遺るように<sup>10)</sup>」。

7連42行 --- 見事な詩である！「42」という数字と Carroll は切り離すことはできない。加えて「7」もそうである。『不思議の国のアリス』でアリスは7歳という設定（実年齢は10歳）。『鏡の国のアリス』はそれから6年後の作品だが、アリスは7歳（と6ヶ月）に設定されている（実年齢は13歳になっているはずなのに）。あくまでも「7」に拘っている。Carroll の生涯において数多くの少女友達が周囲にいたが、アリスだけには齢を重ねて欲しくなかったのである。いつまでも純真無垢な一桁の年齢で留まって欲しかった、と言われている。この思いが7歳という設定に繋がっていると思う。

4. 次に取り上げる詩は『鏡の国のアリス』の後に置かれている、アクロスティックで、アリスのフルネームが各行の頭に練り込まれている：

- 1) A boat, beneath a sunny sky  
Lingering onward dreamily  
In an evening of July ---
- 2) Children three that nestle near,  
Eager eye and willing ear,  
Pleased a simple tale to hear ---
- 3) Long has paled that sunny sky:  
Echoes fade and memories die:  
Autumn frosts have slain July.
- 4) Still she haunts me, phantomwise,  
Alice moving under skies

Never seen by waking eyes.

5) Children yet, the tale to hear,  
Eager eye and willing ear,  
Lovingly shall nestle near.

6) In a Wonderland they lie,  
Dreaming as the days go by,  
Dreaming as the summers die:

7) Ever drifting down the stream ---  
Lingering in the golden gleam ---  
Life, what is it but a dream?

3行1連で単純な a-a-a という脚韻形式となっている。この詩も7連から成り立つ！但し、分量的には半分となっている。にも拘わらず、第一級の詩に入る、という世評に異論はない。各行の頭の文字が制約されているという条件に縛られながらも、立派に意味が成り立つのだから見事というほかない。アリスのフルネーム：Alice Pleasance Liddell が読み取れる。愛しの少女たちの名をこのように詩に詠みこんで、本人に送っている。多くの実例が遺されている。

精読していくことにする。第1連はあの歴史的な Isis 川に浮かんだボートの上での光景で、Carroll の脳裏から離れることはなかった、ということが伺われる。現実には曇天であったにも拘わらず a 'sunny' sky である。あの日の出来事は Carroll にとっては夢のようなひと時 ('dreamily') であったであろう。ゆったりと前に進んで欲しいという思いが 'lingering' という語に読み取れる。'be slow to depart, fail to arrive punctually' (POD) という語感からも察することができる。'an evening of July' -- 「7月のとある夕べ」とあるが、言うまでもなく7月4日の、である。押韻に関して言うと、'dreamily' がネックとなる。実際の発音が /dri-milai/ なので。この連では 'sky' と 'July' の音は動かせない。従って、ここでは無理にこの2つの名詞に合わせなければならない。いわゆる視覚韻 (eye rhyme) となる。この言語学的用法が Carroll 全体の詩に多く見られる。意味と語形を完全に整合的に合わせる難しさである。

付言すると、実は 'July' の発音は「18世紀、Dr. Johnson の時代までは /juli/ で、今日でもスコットランド南部ではこの発音がなされている。今日の発音は変則的で説明不能」(OED) である。

第2連に移ることにする。Dodgson 先生のお話に熱心に耳を傾ける三姉妹の姿が詠み込まれているのが分かる。'nestle' = 'settle oneself comfortably; press oneself affectionately' (POD) という語感から、いかにも仲睦まじいアリス三姉妹が寄り添っている姿が 'Children three that nestle near' に読み取れる。一言一句聞き逃すまいとする姿勢が 'eager eye and willing ear' の中に現れている。ここに現れる 'eye' と 'ear' は視力と聴力を表すので単数形で可。聞き逃してなるものか、という強い気持ちが 'willing' に読み取れる。'a simple tale to hear' は本来なら 'a simple tale to listen to' となるところだが、押韻の関係で 'hear' で代用していることになる。'simple' = 'unsophisticated, plain or frank or natural or artless' (POD) なので、いかにも「純真素朴な、無垢な」お話を期待しているかが分かる。'simple' にはプラスの意とマイナスの意が混在する。

第3連に移ることにする。現在完了で始まり、現在完了で終わっている。あの運命の日が過ぎ

去り、記憶が朧げになったことが 'Long has paled that sunny sky' に現れている。'that' には語り手の熱い感情が籠っている。これが 'that' の持つ、いま一つの力である。'this' にはこの用法はない。こだまが色褪せ、記憶が絶え絶えになるのは今の瞬間なので現在時制。3行目は幾たびの秋の経過で7月が殺された、とある。つまり、あの楽しかったひと時はもう帰ってこない、という寂しい思いが現在完了の中に込められている。

第4連に移ることにする。Carrollの脳裏にはいつまでもアリスが留まっているのが読み取れる。'haunt' = 'be persistently in or with' (POD) という語感からもアリスはいつまでも Carroll とともにあることになる、それはあくまでも幻にすぎないけれども ('phantomwise')。この連では第1連の 'beneath a sunny sky' が 'under skies' と、前置詞に違いが見られる。'skies' と複数形になっているのは脚韻の相手 (rhyme fellow) が 'phantomwise: eyes' だからである。「アリスが空を駆け巡る」という表現も目から鱗である。あくまでも空想の中の動きなので「目覚めている目」 ('waking eyes') には決して見えないことになる。ここで 'eyes' と複数形になっているのは形を成す肉眼なので。かつ 'phantomwise' と押韻させるため。いずれにしてもこの連の脚韻語の中心は 'phantomwise' となる。

第5連に移ることにする。内容的には第2連と酷似する。「依然として」 ('yet') 三姉妹は Carroll の頭の中では熱心に聞き耳を立てている状態である。それもお互いに仲睦まじく ('Lovingly')。'hear': 'near': 'hear' は順序こそ異なるが 'near': 'ear': 'hear' と同じ脚韻語で構成されている。

第6連に移ることにする。すでに完全に三姉妹はお伽の国 (Wonderland) の世界の住人となっている。日々は夢のように過ぎ去り、月日も然りで、もう帰ってこない ('die')。惜別の情が溢れている連となっている。

最終連の第7連に移ることにする。'drifting down the stream' の中に川「下り」の光景ということが分かる。もっとも実際には陸路で帰ったのであるが (既述)。帰る時刻は大雨になっていたので「黄金の輝き」 ('golden gleam') とは相反するのだが。ここにも疑似頭韻が表れている。'gleam' は弱い光なのでここでは文脈に合致する。川を下りながら依然として Carroll の頭の中ではあの日の出来事が去来しているのもので再度の 'Lingering' が効果的となる。

最後の「人生、それは夢でなくて何であろうか」というのは Carroll が辿り着いた人生哲学ではなかろうか。あの楽しかった出来事は果たして夢ではなかったのか、という虚しい思いは現実の厳しい人生とオーバーラップしているようにも思われる。人生 = 夢に過ぎない、というのは Shakespeare の哲学でもある。最終行には悲しい響きが漂っている感がある。人生の悲哀がありながらも英語そのものの響きは音楽的とも言える。

さて、3番目に取り上げるのは詩そのもののタイトルはないが、前2者と遜色のない、抒情溢れる内容となっている。『鏡の国のアリス』の前に置かれている献呈の詩である。6行1連、全6連36行から成り立つ。詩形は5連が a-b-a-b-c-c で、途中の第3連だけが a-b-c-b-d-d となっている。このような詩形が乱れている詩を Carroll は少なからず遺している。なぜなのかは分からない。

この詩もアリス個人を謡った詩となっている。Carroll の詩の中ではトップ3に入るほどの評価が高い。あの楽しかった夏の思い出が強烈である。

それではまず、全36行を開示する。

- 1) CHILD of the pure unclouded brow  
And dreaming eyes of wonder!



Though time be fleet, and I and thou  
Are half a life asunder,  
Thy loving smile will surely hail  
The love-gift of a fairy-tale.

- 2) I have not seen thy sunny face,  
Nor heard thy silver laughter:  
No thought of me shall find a place  
In thy young life's hereafter ---<sup>10)</sup>  
Enough that now thou wilt not fail  
To listen to my fairy-tail.
- 3) A tale begun in other days,  
When summer suns were glowing ---  
A simple chime, that served to time  
The rhythm of our rowing ---  
Whose echoes live in memory yet,  
Though envious years would say 'forget.'
- 4) Come, hearken then, ere voice of dread,  
With bitter tidings laden,  
Shall summon to unwelcome bed<sup>11)</sup>  
A melancholy maiden!  
We are but older children, dear,  
Who fret to find our bedtime near.
- 5) Without, the frost, the blinding snow,  
The storm-wind's moody madness ---  
Within, the firelight's ruddy glow,  
And childhood's nest of gladness.  
The magic words shall hold thee fast:  
Thou shalt not heed the raving blast.
- 6) And, though the shadow of a sigh  
May tremble through the story,  
For 'happy summer days'<sup>12)</sup> gone by,  
And vanish'd summer glory ---  
It shall not touch, with breadth of bale<sup>13)</sup>,  
The pleasance<sup>14)</sup> of our fairly-tale.

それでは第1連から精読していくことにする。

第1行目は曇りなきアリスの眼の持ち主、アリスよ、という呼びかけ相当の一文と言える。さらに「驚きに満ちた夢見るような眼」とある。純粹無垢なアリスへの想い、未だ消えやらずの感

がある。時は素早く移ろい（'though time be fleet'）私とあなたは人生の半分は別れ別れの状態、と言っている。さらにあなたの愛くるしい笑顔は妖精の物語という愛の贈り物を確かに受け入れてくれるであろう、と希望を託していることになる。'unclouded' を POD は「特に幸せについての形容」と定義している。この文脈に合致する。'dreaming' も 'wonder' もアリスに関してはその形容になくはならない語である。'fleet' を POD は特に詩語で 'swift' と同義としている！ 'thou', 'thy', 'thee' がそれぞれ 3 回、4 回、2 回出てくる。これは親愛の情を表し、'you', 'your', 'you' よりも心理的距離が近いことを意味する。アリスを身近な存在と思いたい Carroll の気持ちが痛いほどよく分かる。'half a life asunder' とあるので、かなりの期間となる。アリスは 28 歳で Reginald Hargreaves と結婚。Carroll は 66 年の生涯を閉じることになる。Carroll とアリスの付き合いは彼女の結婚後は疎遠になってしまう。従って、20～30 年間は少なくとも親しい交際はしていないことが判明している。このことがこの 3 行目のことを言っているのではないか。最終行は必ず『不思議の国のアリス』という贈り物を指す。たとえ会えなくなってもアリスのために書いたこの物語だけは受け入れて欲しいという語り手の切なる思いが滲み出ているように思われる。

第 2 連に移ることにする。アリスの顔を見なくなってから、また笑い声が聞こえなくなっから久しく経った、とある。明るい (sunny) 笑顔と素敵な (silver) 笑い声がいつまでも脳裏を横切っているらしい。'sunny' を POD は '(of face) cheery, diffusing cheerfulness' と定義している。アリスの顔は周囲に快活さを提供していたことが分かる。'silver' は色艶が銀のように輝いていることを言う。アリスの笑い声は屈託のない、純なそれであったのであろう。別れ別れになったあと、あなたの中に私を思う余地などないはず、と言っている。今となっては私のあのお伽話に耳を傾けて下さるだけで十分、とある。『不思議の国のアリス』だけはせめてもの、いつまでも心に留めておいて欲しい、という切なる思いが伝わってくる。

第 3 連に移ることにする。この連だけが脚韻構造が異なる。また日を改めて新しい話が始まることもあった、夏の太陽が輝く季節が訪れると。綺麗に響き亘る鐘の音が私たちがかつて漕いだときのリズムに合わせてくれるのに役立ったものだった。その鐘の音のこだまが依然としてまだ記憶の中に生きているのである。もっとも、過ぎ行く年月は妬み心で「忘れろ」と言っているが。

'simple' とはここでは雑音の伴わない、綺麗な、鐘そのものから出てくる純な音を表している。おそらく Oxford 界限あるいは田舎の教会から鳴り響く鐘の音が連想されよう。Carroll がボートに乗せて遊んだのはなにもアリス三姉妹だけではなかった。他にも同じ体験をしたけれども、やはりアリス三姉妹との、あの歴史的な船遊びほど記憶に残るものはない、と言っている。いつまで経っても忘れることはできないのが 'forget' という語に収斂できる。

第 4 連に移ることにする。「さて、ならば聞いておくれ、辛い知らせが一杯詰まった怖い声の前に、物思いに沈んだ乙女御を微睡の床に呼び込むことを！愛しのアリスよ、私たちが年取った子どもに過ぎないのです、自分達の微睡の床が近くにあるのが分かる気になるのです」。文頭の 'Come' は間投詞の役目を成し、「さあ、さて」という談話標識でもある。'hearken' は古語で 'listen' と同義。英語本来の動詞で 'hark' という語形で中英語に頻出する。'ere' も古語で 'before' と同義で、Shakespeare の時代でも頻用されている。'dear' はアリスへの心の中での呼びかけとなる。'unwelcome bed' は意外と難しい。フロイド学派の人々なら意識下では婚礼の床、という解釈を表明して憚らない。

第 5 連に移ることにする。「外は霜、目つぶしに合うような猛吹雪、陰気な、気違いじみた雪嵐、内では暖炉の灯明かりの、赤味を帯びた輝き、そして子ども時代の喜びの愛の巣。魔法の言葉はそなたをしっかりと捉えて離さない。そなたは外の荒れ狂う突風など気にして欲しくない」とあ

る。愛しのアリスに世間の厳しい風に当たって欲しくないという思いが伝わってくるようである。いつまでも愛の温床の中にかくまってやりたいのかも知れない。‘without’と‘within’が好対象である。まさしく「鬼は外、福は内」の感あり。この連にも‘thou’と‘thee’が見られ、アリスを身近な存在と見ている。

最後の第6連に移ることにする。「溜息の影がアリス物語を揺り動かすかも知れない、だって『幸せな夏の日々』は過ぎ去り、夏の栄光は消え失せたのだから。私たちのあのお伽話の喜びを悲嘆の息吹でもってため息の影で触れて欲しくない」とある。「あの楽しい日々はすでに過ぎ去ってしまい、あのお伽話の存在が忘れさらられるかも知れないが、絶対にそんなことになって欲しくない」という語り手の切なる思いが滲み出ているように思われる。

アリスへの、また不思議の国のアリスへの去り難い惜別の情が痛いほどよく読み取れる内容となっている。

以上、取り上げた3つの詩はいずれもアリス（たち三姉妹）への熱い思いが込められたものとなっているのが分かる。いずれの詩も多くの批評家達によって高い評価が与えられている。特に最後の詩は憂愁を帯びて、もの悲しい気持ちにさせられる。おそらく Carroll 晩年の作と思われる。脚韻構造はいずれも「規則通り」となっていて、視覚韻などの逸脱の例は見られない。

#### 注：

- 1) Gillian Beer: *Jabberwocky and Other Nonsense* (Penguin Books, 2012) の裏表紙に ‘these verses show Carroll’s imagination at its most subversive’ とある。
- 2) この連にある3つの ‘little’ は ‘Liddle’ (rhyming with ‘fiddle’) とかけてあり、さらにこれはアリスの姓 ‘Liddell’ とも押韻する (Martin Gardner: *More Annotated Alice*, p.9)。
- 3) 聖地巡礼者は頭に花冠をいただく習慣があった (Martin Gardner, *The Annotated Alice*, p.23)。
- 4) ロンドン気象観測所の記録では1862年7月4日(金)は ‘cool and rather wet’ とある (Martin Gardner: *More Annotated Alice*, p.5)。
- 5) Selwyn Goodacre: *Elucidating Alice*, p.7)
- 6) 安井泉：『対訳・注解 不思議の国のアリス』、研究社、2017、p.4)
- 7) Selwyn Goodacre: *Elucidating Alice*, p. 7)
- 8) R.D. Sutherland: *Language and Lewis Carroll*, chap. 2 (pp.21~28)
- 9) Anne Clark: *The Real Alice*, (Michael Joseph, 1981), chap. 5
- 10) Carroll の女友達が成人すると疎遠になっていくが、この連の詩行が醸し出す悲哀の根拠はない。後年のアリスの Carroll への思いが含蓄されている (Martin Gardner, *The Annotated Alice*, p.173)。
- 11) 物思いに沈む乙女への言及で、単なる就寝時間の微睡という基督教的暗示であるが、意識下では婚礼の床の意も含蓄されているかも知れない (Martin Gardner, *More Annotated Alice*, p.136)。
- 12) この3語は『不思議の国のアリス』の文字通り最後の3語である。
- 13) ‘bale’ = ‘sorrow’ (Martin Gardner: *More Annotated Alice*, p.136)
- 14) 『不思議の国のアリス』の本文中に現れている「喜び」を表す語は ‘pleasure’ であるが、ここでは彼女の middle name を意識してこの古語が使われている (Martin Gardner: *More Annotated Alice*, p.136)。

#### Textbooks, References and Dictionaries Consulted:

- 1) Hugh Haughton, Lewis Carroll: *Alice’s Adventures in Wonderland, and Through the Looking-Glass*, Centenary edition, Penguin Classics, 1998
- 2) Martin Gardner, *The Annotated Alice* (rpt), Penguin Books, 1975
- 3) Martin Gardner, *More Annotated Alice*, Random House, New York, 1990
- 4) Selwyn Goodacre, *Elucidating Alice --- A Textual Commentary on Alice’s Adventures in Wonderland*, Everttype, Ireland, 2015

- 5) R. D. Sutherland, *Language and Lewis Carroll*, Mouton, 1970
- 6) J.A. Simpson & E.S.C. Weiner, *The Oxford English Dictionary (OED)*, 20 volumes, Clarendon Press, Oxford, 1989
- 7) E. McINTOSH, *The Concise Oxford Dictionary (COD<sup>5</sup>)*, Clarendon Press, Oxford, 1964
- 8) E. McINTOSH, *The Pocket Oxford Dictionary (POD<sup>5</sup>)*, Clarendon Press, Oxford, 1969
- 9) Paul Procter (editor-in-Chief), *Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE)*, Longman Group Ltd., London, 1978